琉球大学学術リポジトリ

原稿 ：『植民及植民政策』第四章 植民の動員

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 矢内原忠雄 キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: 矢内原, 忠雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/38337

START

REEL No. A-009

琉球大学

矢内原忠雄文庫

史　料　名	原稿『植民及植民政策』第四章 植民の動員（積極的）（植96～117、118～131）
封筒番号	464
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 21 日
撮　影　者	富士写真フイルム　株式会社
備　　考	

矢内原忠雄文庫

封筒番号： 464

史料名	原稿『植民及植民政策』第四章 植民の動員（積極的）（植96～117、118～131）
資料形態	B4原稿用紙／2綴り
枚　数	36
頁　数	36
縦（cm）	
横（cm）	
厚さ（cm）	
書誌的事項	植民 今泉分類記号： Y

琉球大学附属図書館

四 三 二 社経済的動向
権帝国主義の動向と権威の変質

一 権威の変質

権威の変質とは、一般に、ある特定の権威が、その権威の対象となる人々に対して、従来持っていた絶対的な力を失うことをいう。

権威の変質は、権威の内部からの変質と、外部からの変質とに分けることができる。

内部からの変質は、権威を構成する人々の意識の変化によって生じる。

外部からの変質は、権威の対象となる人々の意識の変化によって生じる。

権威の変質は、権威の対象となる人々の意識の変化によって生じるが、その変化は、権威の内部からの変質によって促進されることがある。

二 権威の変質の原因

権威の変質の原因は、大きく分けて二つある。

一つは、権威の対象となる人々の意識の変化である。

もう一つは、権威の内部からの変質である。

権威の変質は、権威の対象となる人々の意識の変化によって生じるが、その変化は、権威の内部からの変質によって促進されることがある。

三 権威の変質の過程

権威の変質は、一般に、次のような過程をたどる。

まず、権威の対象となる人々の意識が変化する。

次に、権威の内部からの変質が進む。

最後に、権威が失われる。

も怖るゝ事なく、その向上を望むが故に、

労働なき資本のより生産的に使用せらるべき

植民地域に移住するものである。

商業的利益の追求

植民地創設の有力なる動因となりしは勿論商業的利益の追求である。「殆んどすべての植民地は、たとえ後には全然他の

経歴のあるものも、その最初は商業植民地であった」と、ロッシャー(Roscher)はいう。[1] 希臘や植

商業的利益の追求

民地はフェニキア人の地中海貿易の有利なるに刺戟せられたる商業的労力の改革であった。[2]

羅馬の四方征服の動因にも亦農業的(土地及び

商業的)利益の探索を認む。中世伊太利諸市(都)の

植民地は亦東方貿易の利益をその主動因

とする。[3] 近世の初め、葡萄牙及び西班牙の植

民的活動は迫剝人口の有(一)たるかなにあらずして、貴金属を得て国家の繁栄を期さんとしたのである。アラビア人の興起(ムハンマド)

印度への陸上通路(商)がトルコ人の興起によりて杜絶(一)たる結果、海路によりて印度(コロンブス)に達せんとするの野心に出でて西航

1) Roscher, Kolonien usw. S.16.

2) 「希臘人の植民活動に對する移住の主因は、初期に於ては商業利益の追求よりも寧ろ土地に對する人口の壓迫に伴ふ不利を避けんとする衝動にあった……植民的の商業利益は既に生産に富める農業民族の故に未だ存在しなかったのである。……更に、東方との接触により文化の進むと共に商業上の利益が興起してきた。……(植民的)企業の大部分の起源は全く商業的投資のものであり、彼等フェニキア人によりて独占せられし有利なる事業の分前に與らんとする努力にあった。」(Keller, Colonigation. P.40-41.)

3) Pavlovitch, M. Foundations of Imperialist Policy. P.23-25.要

98 稿

せーめ、(Vasco da Gama ヴアスコ・ダ・ガマ)をして東航せーめた。而して東方より求めんとするものは黄金と香料であつた。

私薬及び英国の東印度会社を始め(近世初期の話題)特許会社の主たる目的は通商貿易の独占的利益に(極めて)あつた。(ここに)重点を置いた。

発達前の植民地貿易の制度は主として奢侈的消費財の輸入(に有)した。之等の、資本主義(クラフト)的生産(獲得)でられたもので(あつた)。

迷夢さか(ま)の(ヤ)埋蔵(宝)物は(に)対する支排(拂)を以てした(側)。その(日本かった)。

(コロンブス)の(アメリカ)発見は、(ヤ)より(ち)かへれる物産(宝)の(銀)貨幣(宝)を以てした(側)。その(日本かった)。

(Columbus が最初の航海より帰るや、彼の歓待的な宴をうけて Castile 及 Arragon の君主に謁見したとき、彼の発見せる土地の主な物産は、僅かなる奴隷を以て他の凱旋行列を以て進行した。それから後あるものはたゞ若干のかなさ髪飾り腕環其他の金製装飾品及び若干俵の棉花にすぎなかった。)

61

1) エリザベス女王の頃の英国の北米植民は、当時にありては例外的に、農業的であったとはいへ、その可能なりしはロンドン商人の理念の出資ありしによった。(Cunningham, The Growth of English Industry and Commerce in Modern Times. p. 119-120. 126.) 即ち商業資本の利益追求と離れざるものであった。

99 植

9

資本主義経済の要求

食料品原料品の輸入の要求

つた」。然るに「数億の棉花」はやかて食糧よりも重要なる植民地物産たるに至つた。

産業革命が英国の木棉工業より起るは周知の事実である。而して之より近代、資本主義経済は起つた。

資本主義経済は資本家的擴張再生産の経済である。その本質は飽くことなき利潤の追求にある。而して止むなき擴張再生産はここに必然的に擴張を伴ふ。故に本質的に擴張である。

擴張は一般に種類の異れる生産物品（例へば棉花、ゴム、羊毛）を植民地より輸入するを有力なる手段とする。加之、植民地より輸入せらるる。加之、植民地より輸入せらるる生産物は多くの場合、原料品及び食料品に属する。

原料品の輸入を必要とし、殊に種類の異れる生産物品（例へば棉花、ゴム、羊毛）は植民地よりの廉価なる食料品の輸入により生産の物的条件を供給せらるる。加之、植民地より輸入せらるる食料品及び原料品の価格は労働の生産性の増加に従ひ逓減する傾向を有する。

然るに資本主義経済は利潤の追求を目的とするが故に、労働の生産性の増加に従ひ逓減する傾向を有する食料品及び原料品の価格を高むることによりて、利潤率（絶対的に）を増加せしめ、廉価なる食料品及び原料品の輸入は労働の生産性の増加に従ひ逓減する傾向を阻止する。故に資本主義経済に於ける生産擴張、利潤増加の要求は植民地の輸入を絶対的に必要とす。

1) Smith, A. Wealth of Nations (Cannan's Ed.) II. P. 63.

~~1)「棉花は植民地の最大物品の一である棉花を得ることは植民地 Bombay の二にあつた。~~

南品輸出の必要

而して貿易生産の維持及び擴張に寄する限り、地主(なりの)地代(食料品更料品の)の輸入はかゝる主義の経済の下に於ても要むせられるであらう。何となれば生産物的条件であるから。而して人口少く、或は生産増進に對しては立替物的条件生産の多き実質的地域(なりの)民の行なる、ほを要むすべきは、本国産物が貧生産主義的たると社会主義的たるとを問はずであらう。

J.S.ミルは「外国貿易の唯一の直接的利益は輸入に依すること。」うれによりて一国はその全生産を得るか或は甚だしき不利(なる条件に)於てのみ生産せうるまい貨財を得るかゝる。とをーた。併乍ら又の過剰(認めたる)資本の排除中も(対する文献的要求)外国貿易は地主地代(帝国主義的)の利益を否定した。1) リカルドーも然り。2) 重ーカす運動及び資本運動並しの両経済各は生産過剰及び資本過剰の理を認めざるか故に、商品は輸出せらるゝ場合には国内に於ける他

1) Mill, J.S. Principles of Political Economy (Ashley's Edition). P. 578-580.
2) Ricardo. Principles of Political Economy and Taxation (Gonner's Edition). P. 278-279.

ローザ・ルクセンブルグの説

101 植

の富の生産によりて似お消費さうまべく、
(者)
富主は外国貿易に投ぜらゝ
(ゐる場合には、)
のみ不便はあつても、其間の
は其の作用品如き生産に向けらゝ得る。(角)品若く
めの唯一の損失者は(変化に
後には)たい征来の購入品の
すりである。
(消費者に止る」と)
然るに実際に於ては変なる点
輸出なき資本輸出が行はれ
(彼等の言ひ如く)
来昆一い。たとひそれが外
迫られたるものにあらず、單に選擇に出でた

るものなりとしても、何故
はそれお資本家に取りて有利
(より)
(その集団の)
なる利潤獲得の方
法たるか故に外ならない。
故にそれはそれだけに於て植民的動因である。併乍ら
(に對)
(ローザ・ルクセンブルグ(Rosa Luxemburg)の「資本蓄積論」)
再生産の必然的要求は
にーたるは即ち
績論」である。2)
を概説ーやう。
資本主義強行は前にも述べ如く擴張再生

(法學博士 河上肇氏著「社会組織と社会革命」上篇第二章は Luxemburg の説)
(資本增殖論)

1) Mill. 前出. P.580.
2) Luxemburg, R. Die Akkumulation des Kapitals.
を解説することによりて福田博士の論(「社会改良と階級闘争」第一篇第二章)を反駁せるものである。

102 補

度の供給がある。擴張再生産は資本家が餘剰價値の全部を消費せずして、その一部を加次年度の資本に繰入ることによりて生産の規模を絶えず擴張することによりて可能である。

この資本化せらるべき餘剰價値即ち追加資本化に必要なる物的形態（即ち追加不變資本と追加可變資本）を備ふるに止まらず、流通經濟の下に於ては、消費せらるべき餘剰價値即ち追加消費資本化に必ず一度び貨幣形態を通過せねばならない。「餘剰價値は其故に必ず貨幣形態を通過せねばならぬ。それは一度び貨幣形態を取るを得ないのである。」[1]

實際の示す事實である。然らば「餘剰價値の一部分の蓄積即ち追加不變資本化の前提の下に於て、餘剰價値實現のための貨幣は何處より來るか」。[2] 若し單純再生産の場合にありては、資本家自ら顧客として其餘剰生産物を買ひ取るか、何となれば資本家の全部の消費資本化餘剰價値を自ら消費しつくすが故である。[3]

1) Luxemburg. Akkumulation. S. 110.
2) 同上 S. 134.

せるに拘らず、労働者の賃銀は、社会的生産の増進に伴ふ剰余価値の一部の増殖に応じて、生産に充当すべき資本家自らが、その一部の消費を節約し、その購買力を減退するか、或は経済組織の変革に依つて、労働者の賃銀を増加するかしない限り、資本家の利益に反するものにして、又実際に於ても、労働者は、資本家の利潤を中心とする資本家的生産の増進に依つては、労働者の自家撞着である。

労働者の購買力は、労働者の全部若くは過半を占むる如き社会に於ては、生産物に対する有力なる市場であり得る。仍つて資本家的生産社会の「敵抗的矛盾」は、

1) 同上 S.136
2) 河津暹、経済学講義要綱 P.162.

次には、「社會の多數者の消費は勞働者階級の限界の點に於て變動する最小限度に押しつけられる」。[1] それは資本家的たる限り、莫大なる餘剰生産物の實現に關心する資本家が、資本家的餘剰價値に相應する勞働者の消費を極度に制限せんとするの傾向を有するからである。即ち「資本主義的社會の成員の大部分が、比較的貧困の狀態に置かれるの必然性」[2]である。

最も良好なる場合に於ても、それは、社會的總生産物のうち一定の價値部分、即ち可變資本、勞働者階級の消費を制限せらるべき部分に對應するものにすぎない。[3] 即ち「資本主義的社會の成員の大部分が、比較的貧困の狀態に置かれるの必然性」[2]である。

最も良好なる場合に於ても、それは、社會的總生産物のうち一定の價値部分、即ち可變資本、勞働者階級の消費を制限せらるべき部分に對應するものにすぎない。[3] 即ち「資本主義的社會の成員の大部分が、比較的貧困の狀態に置かれるの必然性」[2]である。

更に、「資本化せらるべき部分は、外部に於ける實現せられねばならない」。[3] 「外部とは何ぞや。それは資本家、勞働者、及びこの二者の所得に從事する「地主、使用人、醫者、辯護士、藝術家、學者等の自由職業者、教會とその官吏及び軍人」[3]に奉仕する僧侶、國家とその官吏及び軍人」[3]以外の社會を意味する。それは純粹なる資本家的經濟に對する外部である。それは「非資本主義的地帶」[4]、「資本主義的以外の國」、「資本主義的階級及び地帶」[4]、「諸國」、「非資本主義的環境」[4]である。

即ち「非資本主義的社會階級」[4]である。

1) Luxemburg. 前出. S. 315.
2) 同上 S. 339.
3) 同上 S. 107

ある。これ必ずしも外国除法本の外国ではない。資本主義の外国、未だ資本主義化せられざる一国内外の後進地域を指す。而して之れ私の所謂宿命的植民地でなくて何であるか。

擴張再生産の程度に伴い普通の意味の外国乗も亦一層大規模となる。不変又は可変資本の基礎は益々強力に擴張せらるゝを要し、為めに資本主義的国民は相互的に常により大なる販売市場を提供す。即ち普通の意味の外国乗も亦一層大規模となるか、併も生産の擴張に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

貨幣形態を取ることにより実現せられた
る強制價値は、擴張再生産のために再び資
本化せられねばならぬ。
現に非資本主義的市場を必要とせる如く、実現せ
らるべき強制價値の資本化は非資本主義的環境の
資本主義化、資本主義的生産方法の不斷の擴
張を要求する。(実現せられたる強制價値の
その價額の相手地において投資せられたるとき
、その貨幣は自身が再び投資国(投資国)の自国商品(例へば鉄道
材料に対する新なる市場を創設すべく、且つ
かくして輸入せられたる生産手段は被投資国
の生産力を増加し、投資国の需要する要物品
の需要する要物品の大量供給を可能なら
らしむる作用をなすであらう。且つ強制價値
の資本化は之を限に自国内において行ふとき
は資本過剰による平均利潤率の低下を来たす
かなに、有利なる投資地を海外において求むる
陶冶を維持(助長)し資本家的営利経済を維持するに
必要である。即ち資本の輸出は亦資本主義的
生産の不可欠の要件たるものと言わねばならぬ
ない。かくて強国の海外投資熱は資本主義的
業績(?)の具現

107 稿

社會主義經濟と植民

の増加を見たのである。(2) 発展に伴う巨額

主義的綿産発展の鉄柵的要求は、原料品食料

品の供給地、商品市場、及び投資地に対する

不断の擴張的追求に於て、植民地の擴張的動因

として作用するのである。

然らば、社會主義的生産の下に於ても之等の

植民地の経済的意義は如何。営利目的の商品輸出(資本輸出は)

し得るか。(社會主義的経済社會に於て

(資本は)

は)植民地は如何。(社會時に割当なしに)

描かれるか。産業各部門の間に統一的

調和あり、又勞働力の生産力增加(即ち消費力

增加)を意味するものとしよう。(植民地は)

徒つて資本はめ何

に業績せらん貨財はめ何に生産せらるゝとも

(植民地は)

(資本は)

(植民地は)

(植民地は)

(植民地

而して地球上の要住地、若くは住民の文明程
多く生産力発達の幼稚なる地方に對しては
、文明社會より資本労働及び技術を輸入
進歩と称すにあらざれなり。之を助発
して社會経済生産の発展に貢献せしむるを得な
い。故に、原始的なる自給自足の社會に復帰
せざる限り、社會主義的統制の下に於ても、
或はその下に於ては尚更、植民地的統制動因は有力に作用するものである。植民地的なるものに於ては
社會的経済生産の発展による富の増加は、社會
主義的社會に於ても容認せらるべき活動
目標であらうから。

二三ページ

植民の積極的動因には未だ社會的なるものが
ある。即ち一の社會群はその精神的優越を以
て他の社會群を文明せんと欲する愛の積極的
要求を持つ。宗教的或は文化的生活力の溢れ
又は政治的支配慾は、社會生活の一面と
て未植民の積極的動因となるのである。

宗教的信仰は自ら倫道的たらざるを得ない

。その信仰を真摯と確信する者は之を他人に傳へずしては止まない。「汝ら往きてすべての国人を弟子とし、父と子と聖霊との名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命じし、すべての事を守るべきを教へよ」のことは基督の遺訓であつた。コロンブスの航海の一動因は基督教の為めの聖戦心は

ヴァスコ・ダ・ガマ

印度に上陸せるとき、「われらは基督教徒と香料とを求めてまりたり」と言つた。ポルトガル、ダ、ガマ

又彼の後援者

た。彼の書翰を求めて手くる事実である。併ゝう同時に基督教徒でまりなることも事実である。近世初期に於ける西葡の旧教徒特にガリシア(Galicia)、十九を紀後半以後アつリカ、アジアに於ける侍道会社の活動は実に驚くべきものがある。十九世紀の侍道的活動、殊に英国侍道学者の特色はその顕著なる国民的色彩にあつた。独逸の(ティンチェンドルフ)Zinzendorf)伯の侍道法は「一ケ所に於て、個人の心に納め限り深く穿ち入ることであつたが

1) マタイ伝第二十八章十九、二十節

2) 「Moor人のAlhambra」にカトリックの旗の掲げられるは、東方及び東方人民を改宗せしむべき再十字軍を暗示するが如くであつた。スペイン半島より猶太人を駆逐せることと彼自身の事とは共にColumbusにとりては同一改革の一部分をなすものと思はれた」。— Egerton, Origin and Growth, P. 27. 尚 Roscher, Kolonien. S. 41 参照。

英国のリビングストン（Livingstone）の計画は全人を包容するものであった」。この個人的救済信仰に対する社会的救化の信道法は、信道に公共的性質を帯びしめ、従ってそれは国民的関心事となった。「国民は救化的現象の中堅者並行者としてこの地位を益々自覚するに至った」[2]かくて宗教信道は植民の積極的動因の一となる。

次に、未開人類社会に干渉しこれを救化指導するは文明国民の積極的であり且つ義務である[3]

とう思想は十九世紀後半以後盛となり来った。この人道主義的思想は一面の文化的優越感と結合して国民の植民的活動を促す一の精神力となった。而して種族の一先天的優劣が高調されるに至った時には特に氏の異なる種族間、政治的支配態も本国民の対外的発展を促す一動因となる。

以上各種の積極的活動因の（相互的）関係につき、帝国主義を中心として次に若干の説明を加へやう。

1) Frick, H. Die Evangelische Mission. S. 275.
2) 同上 S. 279
3) Gobineau は文明の特質は種族的に決定せられ、種族は先天的且つ生物的に優劣の差を有し、而して諸種族の間にありては白人、白人の間にありてはアリアン種族が最高の文明を有すると論じた。(Gobineau, Essai de l'inégalité des Races humaines. 1854. 特にゲルマン種族 Schemann, 独逸譯, Versuch über die Ungleichheit der Menschenracen. Bd. I. Kap. 11. 16等)。彼の説は白人優越説の基礎を置きたるものとして特に独逸人に信奉者多く Gobineau Vereinigung を組織して彼の主張を宣伝した。

帝国主義の本質

シュムペーターの説

帝国主義とは何か。シュムペーター(Schumpeter)は之を定義して、「一定の限度に止まることを知らず膨脹的に発展せんとする、一国家の実目的なる傾向」であると為す。(ここに「実目的」とは即ち無限の膨張を目的として、それ自体以外には之により て満足せんとする特殊の具体的利益の存在を意味する。)此の無制限なる膨脹の傾向、欲求を意味する。膨張慾、衛飾的なる戦争及び征服政策は歴史の各時代に於て重要なる作用をなしたるものであるが、

あるか

斯くの如き傾向は、社会構造の特殊なる状態の産物であり、社会構造の特殊なる状態の生存上の必然、並にかくの如き状態の下に於て獲得された特殊的傾向及び社会的構成の存続性に基きて生ずるものであり、而して国内政治的関係に於ける支配階級による政治的好戦的傾向は支持せらるゝ事実は、各時代の帝国主義——(シュムペータ特に諸帝国主義(Imperialismen)なる複数形の語を

(1) Schumpeter, J. Zur Soziologie der Imperialismen. S. 5. (1919.)

112

同ふ[1]——に共通なる社會學的に本質的特色にして、社會學的研究上(史的唯物論者も國家主義の)統一的觀念を可能ならしめうる。即ち彼によくしめうる所以である、と(アッシリア)ルぼ埃及、波斯等の古代國家、及び(アテネ)國家、羅馬帝國主義(Weltreichimperialismus)[2]、近世封建的諸國家の支配者帝國主義(Herrscherimperialismus)[3]も共に、その國民の社會的構成が軍的であるか、或は少くともその支配者階級が軍人的であるとにより、その社會的狀態は必然的に戰爭、征服、無限の奴隷的支配擴張を要求する。「軍

國的社會若くは軍人的支配の下にある社會は戰爭を生命とする。」故に(アテネ人の)戰爭の目的は(ペルシヤ人の)宗教的信仰の擴布(如き)にあらずして、その支配の擴張——戰爭及び征服とそれ自身にあり[4]、(諸君)封建主(近世)帝國主義(の如く)、主(諸君)御國家の奴隷的僞裝及び軍政策はその社會的構成の如何性、及びその支配階級の傳統的傾向によりて說明せらるべく、征服のもたらす直接の利益によりて說明せらるるを得ない」[5]。而して現代に於ける帝國主義(近世)の如き(諸君)封建主)の絶對的君主國家の社會的構成、その支配事

1) 同上 S.6.　2) 同上 S.48-49.　3) 同上 SS.20, 30.
4) 同上 S.37　5) 同上 S.32　6) 同上 S.45

利益関係、その他現的傾向の残留物にして、

「決して資本主義の内在的論理より発展せるものではない」。それ故に「帝国主義を以て資本主義の必然的形態と解し、或は資本主義の帝国主義への発展に就て語るは根本的に誤謬である」。[2] 何となれば資本主義の本質的傾向は自由競争的経済社会にあり、その利益は非戦に存する。[3] 自由主義的傾向は人の精力の大部分を経済的活動に集注せしめ、為めに戦争及び軍備の如きは国民の有する能力の一部を消費するに過ぎないからである。[4]

(資本主義に本質的なる)

而して自由貿易の下においては社会の如何なる階級も政治的の発展とそれ自体とみて何等の利益をも有しないのである。[5] 従って国家主義軍事主義は資本家階級にとりては経済的に生ずるものにおらずして寧ろ政治的の負担であり、[6] 「君主的権力の財政上の利益に基き発生せるものである」。[7] 国家主義軍事主義の産物なるのイデオロギーも亦君主制国家の産物であって、これらの資本主義以前時代の遺物は感情及び行動の連続性に基き現代社会にも入り来って居るが、之等の本質的に非資本主義

1) 同上 S.75. 2) 同上 S.69. 3) 同上 S.52-53
4) 同上 S.58. 5) 同上. S.69.

資本主義の発展に伴って
次第に消滅すべく、その最も発達せる英に於
て最も早く消滅する。[1] 之れ後国の不
の歴史の示すところである、[2] 即ち
チシュムペーターの帝国主義観である。
シュムペーターが帝国主義の本質を以て世
界的支配的支配権の擴張にありとなせるは
正しい。それは一国のその固有の地域以外に
政治的支配を擴張し又はこれを維持せんとする
の欲求である。[3] 彼が戦争及び征服を重視せ
ざるは正当であるが、之等を帝国主義実現の手
段たるものであつて、帝国主義そのものではな
い。彼が帝国主義を以て前時代の暴力に
て資本主義と本質的に相反するとの論に對
しては私の全く承服せざるところである。それは先
づ何よりも歴史的事実の裏切るところである。若
し帝国主義が資本主義の発達と共に減
の旧勢力に過ぎず、資本主義時代以前より持ち越
退すべきものとせば、それは十九世紀末以来に
於ける一層の発展はあり得ない。
故に之よりも寧ろ以前に於て軍事的

1) 同上 S.73. 2) 同上 S.53-56.

とを留むする。然るに事実は十九世紀の半頃を境は却て自由主義、英国に就ていつは小英国主義（Little Englandism）の時代であって、帝国主義なその後に勃興したるものである。（1）更に彼の列強の資本主義経済社会のうち最も資本主義の前時代の要素を継承せると共と少きはアメリカ合衆国にんての国家のうち最も帝国主義的ならざるものがあらうか。帝国主義なりとして（2）仮設の証明のためには（米）英国の近年に於ける軍国化、帝国主義化の眼を見張らざるものがあらうか。仮令そうであるにせよ、アメリカ合衆国は常に軍国主義と影相伴ふ。仮照国主義は前時代の社会的構成の反射に過ぎざるものではない。米国は軍国ではなかった。

然るに資本主義の悪たらしく発達せる今日、それは陰処する軍事的勢力となった。米国資本主義の発達ぶりを軍事化し帝国主義化しと見るのが、却って正を失する歴史的図像の把捉である。

私は昨一九四一年の暮から本年の一月末に刊行せられんとする

---

1) Seeley 既に ~~十七~~ 十七、八世紀の英国の海外発展に就て曰く、「此の時代の英国の主たる特色はそが商業的にして同時に好戦的なりし点になすと思はる。商業と平和との間には自然的法定在すとの俗論流行せるの故に、之れ対して、近世英国の戦争は封建的貴族制の影響に帰せしむべしと推論せらるるが、即ち先祖階級はその起源に於て皆他と同様に自然に好戦的であり、反之商人は随所なく商業を営むを欲するが故に自然に平和を愛するというのだ。政治学上に於ける a priori 的推理法の好標本ではないか！ …… 十七、八世紀の英国史を通じて支配する法則は戦争と商業との密切なる相互的関係、従って之の両者も固より商業は自然に戦争で妨害、戦争は商業を助長するという点にある。私は敢て十八世紀の戦争は中世紀の戦争に比し比較にならぬ程大規模であり、且つ負担重きものであったことを指摘した。~~然も~~ 然も経済上従いが十九世紀の戦争も亦大きくあった。云々。(Seeley, J.R., Expansion of England. 1902. P.109-110)。 Schumpeter の

帝国主義と資本主義

彼の資本主義的社会（シュムペーター）

私は本稿の見地を以て

由競争社会なりという。

も、自由競争は（の後に）戦争及び征服人の神経を緊張

せしめて、戦争及び征服を厭みさらしめる

や。競争は即ち戦争である。一面において一方面に

於ける競争は他の諸方面の競争力の聯合的援

助を要求する。経済的競争が軍に経済的競争

に於らず、政治的軍事的競争力によってその

決勝を見るに至るは敢て不思議なる筋道では

ない。競争的経済社会のイデオロギーが本質

的に非軍国的なりとするは甚だしき矛盾である。

更に彼が現代社会に於ける産業集中、金

業独占、保護関税政策等を目して（帝国主義時代

の通弊）、関税等の精神の残影なりとするは（甚だしく）時代錯誤である。

過去なくして現在はない。

過去何ら「死者は常に生者を支配す」[3]との

如く、彼の社会的基礎は甚だしき過去であり

現代の社会的諸運動を支配するものは主

として現代の社会的諸関係である。

現代に於

---

1) 同上 S.76.
「社会的帝国主義観も敢て珍しき卓見ではないまを知るに足るであろう。」

2) Schumpeter. 前出, S.55-56.

3) 同上 S.76

乙盟主の独立的傾向や関税戦争が激しいのは、資本主義両時代の共通現象である。

ない。これは資本主義的競争の結果である。競争は独占に導く。（独占は資本主義の内部に於ける独占の発展の結果である。）

我経済内部に於ける独占の傾向である。（自ら発達せる傾向）

然るに経済的に見れば資本主義的生産は国境無く、国境は人為的国際競争を除去する傾向を有する。

世界の経済の安全なる統制の下に於ける独占の傾向

り、独占的資本相互の競争は存在せざるを得ない。

而して国家が互に特異なる専属意識をもつて相対立する対等関係は国民経済の競争たる形態を取るであらう。

何にかする競争であるか。即ち世界経済に於ける独立的地位に対する競争である。即ち自国の経済的文化的発展に関する競争である。

故に、資本主義は本質的に非帝国主義であり、との論は成り立たない。と思はれる。

帝国主義は世界制限なる政治的支配擴張の欲

帝国主義ノ目的

117

(1) 同上 S.49

無目的、無目的のものであり得るか。政治的支配の拡張者は征服をはなれて、それ自体に於ほを持つものであり、如くに思はれ、それ以外に遠的意べき内容あるによりて始めて、その究き意味を実現する。政治的に支配せんとする欲求は実在する。併乍ら支配のための支配、戦争のための戦争、征服のための征服は、それ自体に於ては甚だ意味ではないか。帝国主義の本質を次て実利に富保する恋なき一の遊戯なりと見るは、私は正当なる見解と思ふを得ない。既に帝国主義はその追求する実質的内容的利益ありとせば、それは如何なる利益であるか。前項に記せるの如く、資本家的生産は内在的に非資本主義的環境に対する支配拡張の要求を有する。[1] 一国の生産集中、企業独占の経済地域の支配を要求するデングのいふ如く、カルテルの政策は帝国主義的なるより外にはあり得ない。[2] それは関税の障壁をより遠くに押しひろむることによりて

1) 本書 P. ㊟
2) Hilferding, R. Das Finanzkapital. S. 504.

119 植

て 国内消費者の購買力の範囲を大にし、(又は単価)
原料及労働力の供給地を自己の勢力圏内に収
むることにより(過剰労働人口の排除地)、企業の縦のカルテル化
を援けまたそれと(がくりて)独占的資本家に対し二
重の利益があるからである。即ち各国の独占
的資本家と敵対する資本主義国は、それによりて
利潤額を増加し、(且つ)従前の実現及び資本化
を容易ならしむ得る。この故に各国の独占
的資本家と敵対する各資本主義国は(生産の発)
展に伴ひ加速的により大なる敗戦賠償となるが、従つ
て資本主義相互間に於ける限り国際取引平
和的国際関係の存在を有利にして且つ必要な
る條件となすに拘らず、(より)より廣き経済地域、即
ちより廣き非資本主義的環境地域の支配に突
しては、各資本主義国相互に益々激しき競
争を生ずるといふ矛盾に満ちた現象を呈する(各国の)
。この(支配圏)勢力範囲擴張に突する経済的競争は政
治的及び軍事的競争力の協力を要求する。「國家
を支配し、その權力を自己の目的に利用せんとするは、人類社會に活動する諸勢力の通有性である。……大資本につい
ても同様のことが言はれる。そは國家を動かして、外國に對し公債の支拂を強要し、有利なる通商條約を要求し、

1) Luxemburg, Akkumulation. 3 S. 339.

植民地を獲得し、競争者を圧迫せしめる」。[1] 故に曰く、「帝国主義とは、未だ占領せられざる非資本的環境の残部に対する競争戦に於ける、資本蓄積の過程の政治的表現である」と。[2] 又曰く、「現代帝国主義の本質を構成するものは、未開地域の諸国の急速なる勢力範囲及び投資範囲の創設並に徹底的支配である。その動機は専ら経済的であり、その目的を達する手段として本国の政治生活に入り来る」と。[3]

以上述べたる如く、レーニンのヒルファディングの説と

(帝国主義の定義)

(経済的又は政治的な)

(全融資本の要求)

(5)

は全く反対に、帝国主義は資本主義的生産と不可離の関係に立つ。[4] 無制限なる経済的又は政治的な拡張の要求は世界政策の積極的動因の総括的なるものと外延・目的と手段の関係に立つのである。何故に経済的に無価値なるサハラの沙漠(ゴビ)や仏国の植民地と帝国主義的世界政策の本質を成すかの不可思議的事実も以上の説述を否定するものではない。

「構成」

(61)

1) Friedjung, H.: Das Zeitalter des Imperialismus. II. Bd. S. 287
2) Luxemburg, 前出. S. 423
3) An Outline of Modern Imperialism. (Plebs Text Books. No. 2) P. 5.
4) Goethe は ~~Faust~~ 言った。
Krieg, Handel und Piraterei,

(次頁へつづく)

大い国旗のみ」なるサハうも、地球分割競争す現代に於ては佛国に仮りて「一の價値を有する。それは廣大なる平方キロメートルを有すれなり」と、ドナンレーは言へり。[2] 之れ、事物限なき鉄土擴張慾の結果なり。彼が現代植民(殊に)の所謂「主植植民」の精神的指導者たるやを見ること、これ程明瞭なるはなし。[3]

「民」の精神的指導者たるドナンレーは、「この欲土よ、何たるやめよ。然る後、植民にまれ、将た航海にまれ、大帝国を領有するとの国民的慾望に基ける帝国主義は、一言にして分つを得ず」である。[4] 帝国主義(政治的支配、征服)がその分枝として軍国主義を用ふるは言を要せず。資本主義と軍国主義との密接なる関係に就ては Luxemburg, 前出 S. 431 以下を見よ。

「戦争」の代りに軍国主義、「商業」の代りに資本主義、「海賊」の代りに帝国主義を置けば、これぞ所謂「三者一体にして分つを得ず」である。

1) "nous n'avons planté que notre drapeau." (Denancy, E. Philozophie de la Colonisation. 1902 P. 151.)

2) Denancy, 同上 P. 226.

3) 本書 P.

4) Denancy, 前出 P. 145.

把握し、（この何物かをば無償で）収奪地域の価
収及びその独占的領有の根拠地として利用す
る[1]は、独占的資本主義の要求するところであり、
旦つ征服及び領有それ自体が金融資本家[2]の利
益であり得る。何となれば彼等は政府に戦争
又は領有の費力を貸与（前借）し、而して政府はこの
資金を以て彼等の統制の下なる産業資本の活
動を要求するが故である。金融資本は産業資
本の如くに輸入せらるべき産物又は自国商品
にすら鉄道を布設し城塞を築造せしむるの力
と利益とを有する。[3]それ故にサハラの領有で
あしも要せず、不生産地と雖もこれを征服
人と欲する。

金融資本はサハラの沙漠

する。

政治的支配欲と経済的支配欲との結合は現
代に特有なるものではない。歴史上の諸帝国
主義に於て等しく見られ得べき関係である。
併乍ら現代帝国主義はその現代的意味に於
ては一八七〇年代以来勃興せる帝国主義の現象

1) Schumpeter, 前出, S. 63.
2) 金融資本 (Finanzkapital) とは独占的に組織された銀行資本と独占的に組織された産業資本とが結合し、且つ前者が後者を統制する如き資本形態をいう。
3) Pavlovitch, M. Foundations of Imperialist Policy, PP. 71. 103.

にて、独逸の競争にかげやかされたる英国に於て先づ興起した。その特色は資本主義や独占的発展度と必然的なる関係を有する集中運動が、独逸に於てはビスマルクは国民政治に（当初は）積極的なる地を政策のためには（地盤得）その主力を注ぎ、容易なかつたが、予定上かくの如き政策に留まることを得なかつた。一八九七年勝利後、大臣ビューロー（Bülow）は自己の計画に従し外務大臣はその東洋政策を擁護して言つた、「未来ある地方に於ける諸国民間の競争場裡より、独逸の当初から除外せらるることは好ましからずと信ずる。」「吾人は何人をも日陰に置かんと欲しない。併し吾人も亦日向に場所を与へられんことを要求する」と。[2] 近代資本主義は

帝国主義とは

資本主義の独占的階段

なり

と定義

帝国主義なる語は1872年 Crystal Palace に於てなせる演説に於て Disraeli が帝国的聯合（imperial federation）帝国の維持（"Preservation of the Empire"）を力説せるに来、政治的運動の標語として用いらるるに至つた。この思想は英国に於ては National Fair Trade League (1880), Imperial Federation League (1884), Colonial Congress (1887以後) 等の実際的運動となりて現はれ Joseph Chamberlain の活動に於て特に顕著となつた。英国帝国主義の最初は既存帝国の現合維持であつたが、この点に止まらずして、更に土の擴張も顕著に行はれた。両者は共通の動因を持つ。自由資本主義の独占的発達と、同じく独占的傾向に発達せる他資本主義国の（同時代以後）競争と之である。（大西伍一著、帝国主義論 P.326以下。Schumpeter. 前出 S.8以下 参照）

報告は英独両国の此資本主義的地域に対する丈的圏擴張の競争（に婦まる）もあると言ふも過言ではないであらう。レーニンは進化帝国主義の基礎の確実に於て此の

一、生産及び資本の集中（発展階段に達し）

して決定的なる物を作り出せること

二、独占的（銀行）資本（と産業資本との）融合し、この金融資本の基礎の上に（成立せること）

三、商品輸出に代つて資本輸出が重要なる特徴を、

金融資本政治の基礎

(5M印 A…1) 10…30

要る意義を得たること。四、資本家の国際的結合の成立して世界を分割せること。

五、資本主義強国の植民世界の領土的分割が終結したりと見得ること、の五項を挙げ[30]

近代帝国主義時代の特徴を示し得て明瞭である。但し私は帝国主義の本質を以て政治的支配の擴張にありとなす。政治的支配といふも必ずしも領土の擴張を意味しないし、政治的権力による干渉をもって足る。而して

資本主義強国の植民的支配圏の擴張若くは統

括は近代帝国主義の主たる内容又は目的をなすものと解する。

而に近代帝国主義は経済的なる特殊動因と帝国主義、即ち資本主義とのものと同一視することに警戒しなければならない。

[30] 前出 S. 90-91.

2) Norke, G. Kolonialpolitik und Sozialdemokratie. 1914. S. 98.

3) Lenin. ~~Imperialismus~~ 前出. S. 90-91.

ある意義を得ること。四、資本家
の国際的団結の発生と、その間の世
界の分割、五、資本主義強国間の
(既に)
欠土的分割が終結したと見得ること。
と、(近代帝国主義)の五項を挙ぐ。(便も)而も(ある)実体
と資本主義との緊密(ある)を力説
もするものである。(注)

五

私はこれより帝国主義植民
政策のうち(主)なるものを(ウルフの帝国主義観)
略述して(帝国主義の非経済的動因)
ウルフは帝国主義の動因を次の人
の信念及び欲求にありとなし、之を
道徳的、感情的、軍事的、及び経済的の四
種に分ち、之等はいづれも植民地獲
得の一動因たり得るものであるか、
アフリカ及びアジアに於ける近世の改
洲諸国の帝国主義の主たる動因な経

(1) ウルフは帝国主義の動因を
政治的及び経済的に
(2) 帝国主義の非経済的動因
(3) ウルフの帝国主義観

(4) ~~Nocke, Kolonialpolitik und Sozialdemokratie. S. 98.~~

(3) レーニン 資本主義最後の階段としての帝国主義 (青野季吉訳) P. 148—150。私は帝国主義(の本質)として以下の五項の拡張にありとなし、資本主義発展の特殊的段階の定義(帝国主義)はその主なる内容若くは目的(の本質)をなすものと(解)する。故に現代の帝国主義は(必然的に)近代的なる資本主義の特殊発展階段を表はすものであるか? それ自体を資本主義と同一視しない。(経済的には) Lenin の挙げる五の特徴即ち世界の欠土的分割の終結状態をもって近代帝国主義の一特徴となす点は何となれば斯くの如き分割終結状態を成立せしめたものそれ自体が1880年代以来の欠土拡張の競争であったから。換言すれば欠土分割の完結それ自体が近代帝国主義のなし遂げる仕事であった。

但し政治的支配といふは必ずしも欠土権の拡張と定まってない。政治的権力による干渉をいふ。

は何であって、前三者は寧ろ経済的利益追求に基いて獲得せられ且つ利用せられることを明瞭に指摘した。[1] ウルフのいふ道徳的動因とは、宗教化せられて偶文明社会の道徳的責任となりとする結果であり、感情的動因とは個人的冒険心及び国家的栄誉心であり、軍事的或は最略的動因とは本国の安全を保障する軍事的必要性である。[1]

動因とは本国の安全を保障する軍事的必要性であるとする等の動因が経済的なるものと相並び若くは相結合して帝国主義にあらはるゝ複雑なる各方面にわたり、之を唯一の動因に帰することは出来ない。帝国主義は社会生活の

ことは否定するを得ない。帝国主義は社会生活の

へば単一の経済的動因に帰することは出来ない。帝国主義は社会生活の複雑なる各方面にわたり、之を唯一の動因に帰することは出来ない。帝国主義は社会生活の複雑なる各方面にわたり、之を唯一の経済的

31

る目的のうち香料と主とせるやの点に存する。

り国によりて少しも一様ではない。併しながら

近代帝国主義時代において

は経済的動因が決定的地位を占める。リビングストンの帰り

旅行に富んで彼の宣教的使命の熱心を認めざるを得ないが、その人道的及び使命の背景には

その有する政治的利益のうち最大なるものの一つとして

生産価値を有するは之れ

(ジョセフ・チェンバレン)

とする英国王及び英国政府

(街ぶべき)

位ほ的利益の認識及び利用において更に敏

であった。北(ナイゲリア)(Nigeria)の占領は都落の公安秩序

を設定し住民の幸福増進の「真実にして純真な

る希望」により(促)かされたるものと主張するは不正直でありうと主張する

名も「その主として後進地域の地帯における(欲求)」により(促)かされた

とを承認せざるを得ないのである(2)

奴隷制度又は奴隷貿易の禁圧はアフリカに於ける植民政策の理

(1) Orr, The Making of Northern Nigeria, P.48. (Knowles. 前出書 P.107 引用による)。

由として主張せられたが、ウールフの説明形式に従つば、寧ろ既得の権利（統治の初期によるも）植民地の領有維持の理由であつた。[1]

由であつた。国際聯盟の委任統治制度の基礎はその地域住人民の福祉及発達を計るは文明の神聖なる使命なること」の主義、並に（独逸的）及び土着古はその使命遂行の資格をもつ主張にあるが、受任国がこの等の地域を統治する権利は実質上大戦進行中の軍事行動による占領に基くものであり、而してその占領の理由若くは目的は他の何物であるにしても居住人

[illegible]の領有権は決して現代的意義に於ける人道的の文化的使命の為ではなかつた。

帝国併合一切

利益の存する限り植民地は獲得せらるる。之に反して有力なる経済的動因の存せざる時は文化的人道的動因の作用すべき委任統治の施政も負担せられない。世界大戦後も統治の施政は負担せられない。世界大戦後の被害土着古の統治を就んで委任統治制度の適用を希望したるはたいアルメニアのみにして、而かもいづれの「先進国」

1) 独逸領東アフリカは Karl Peters の指揮によりて占領せられたが、1888年アラビア人の奴乱起りて勢い猖獗たるや、Bismarck は奴隷貿易防圧を理由として英、伊、葡三国海軍と聯合して海岸の封鎖を行い、又独逸議会に於て奴乱鎮定費捻出論ありしに対し同一理由の下に之を通過せしめた。(Weidner, F. Die Haussklaverei in Ostafrika. SS. 80. 81.)

もアルメニアに對する佛國の責任圍ゐるを肯んずるものの無かつた。「その理由はさぐるに絶かず。他の地方に於ては石油其他の鑛産あり、鐵道及び棉花栽培地の投資すべきあり。然るにアルメニアに於てはたゞ基督信者のために資本主義的の犧牲を拂ふの要ありしアルメニアは、社會主義ソビエット聯邦の捨ふ處となつた。それはソビエット聯邦に取りては又エット聯邦に取りては又た反帝國主義的の心理的價値あるが故である。」[2]

植民政策の實施上の困難は實際に於ては植民地統治政策の内容が特に經濟的利己的搾取にありといふのではない。否、植民政策の根本は却つて益々資本家階級の利益を擴張することを多くならんとするに至つた。國際聯盟の委任統治の制度も委任國の權利獲得の動因或いは目的は主として經濟的支配の擴張にあつて、[3]人道的精神の發露に基しなかつたとするも、統治の方針に幾分の考慮を拂ふにせよ、[4]なほ依然として帝國主義的の心理的價値あるが故である。[5]精神的政治

植民政策の實施上の困難は實際に於ては植民地統治政策の内容が特に經濟的利己的搾取にありといふのではない。否、植民政策の根本は却つて益々資本家階級の利益を擴張することを多くならんとするに至つた。國際聯盟の委任統治の制度も委任國の權利獲得の動因或いは目的は主として經濟的支配の擴張にあつて、[3]人道的精神の發露に基しなかつたとするも、統治の方針に幾分の考慮を拂ふにせよ、[4]なほ依然として帝國主義的の心理的價値あるが故である。[5]精神的政治

國家的榮譽心若くは國家の威嚴維持の如き動因たることは全然存在せざるにあらざるも、寧ろ取得の地方地域の利益の爲めといふことの方が多い。[4]

國家的榮譽心若くは國家の威嚴維持の如き動因たることは全然存在せざるにあらざるも、寧ろ取得の地方地域の利益の爲めといふことの方が多い。[4]

植民地の取得は主として經濟的な動因から起つたものであつて、[3]世界の未開地を利用すれとも、常に之に對する抵抗を伴ふ。[4]

植民地の取得は主として經濟的な動因から起つたものであつて、[3]世界の未開地を利用すれとも、常に之に對する抵抗を伴ふ。[4]

世界帝国主義を形づくるに至つた[1]が經濟的帝国主義の特色であり、近代の植民政策の特色である。[2]

世界帝国主義を形づくるに至つた[1]が經濟的帝国主義の特色であり、近代の植民政策の特色である。[2]

と呼ぶ所以である。[3]

と呼ぶ所以である。[3]

(略)

(略)

1) An Outline of Modern Imperialism. (Plebs Text Book) P. 98.

2) Woolf、前出 P. 36.

3) 近世植民地獲得の主たる動因が經濟的なりといふのであつて、(必ずしも)近世植民地統治政策の内容が特に經濟的利己的搾取にありといふのではない。~~(Woolf, P. 15.)~~ 否、植民政策の根本は却つて益々資本家階級の利益を擴張することを多くならんとするに至つた。國際聯盟の委任統治の制度も委任國の權利獲得の動因或いは目的は主として經濟的支配の擴張にあつて、人道的精神の發露に基しなかつたとするも、統治の方針に幾分の考慮を拂ふにせよ、なほ依然として帝國主義的の心理的價値あるが故である。(~~Woolf~~ Woolf. 前出 P. 104 以下參照).

4) 此の事實は(略)も同樣である。

5) 精神的政治

植民の動因は以上述べた如く複雑なる相互的関係を有するが、而して日本植民(人)(地)の動因は、実際的植民(地)に対しても、形式的植民に対しても、消極的動因についても、積極的動因についても、その認めうべきは経済上及び国防上の(思想的)政治的等の理由の如くである。

併しながら植民地獲得の動機は必ずしも一致せず、不一致に基く植民地の生活の不安を脱せんとする社会的消極動因、又は宗教的人道的等の積極動因、又は国防上の政治的理由の如きは、(他)社会運動を教化指導せんとする積極的植民動因の作用等し、若くは援用せらるることとすら称いある。(か。)

各植民動因の圧力の同等なる場合に於ても現実に移住植民地の行はるゝ程度は少しも同一でない。之に影響する事情の(は二あり。その)一は移住の習性である。保守退嬰の気風

4) Woolf. 前出。P. 20-23。独逸帝国議会にては(始め)植民地領有に伴う軍事費及統治費の支出に対する反対が強かった。(1885年)。併ら反対党の(たゞ快党の)議員も(立憲諸党の)移住地及び高官等(も)として(も)見ゆる(不明瞭なる)ことを指摘するけれども(一度び外国にまし独逸植民地維持の方針に及べば)「独逸帝国の体面と権威を維持するに必要なる政策は熱誠をもって支持すべきを声明し、Bismarck の彼等を用いて愛国心を鼓吹せる(彼等の「愛国心」を振興する)ことがあった。(Noske. Kolonialpolitik und Sozialdemokratie. S. 33-34).

5) Woolf. 前出 P. 23-24.

と積極進取の精神と社会肆の植民実行に影響すること少くない。生れ故郷に帯を有する習性と活動の天地を廣き世界にもむる気風。要するに社会肆を支配する人生観せ界観のあ何なであ歩る。

事情の第二は移住の便宜である。移住地に関する知識及び移住の資力之に属する。前者は移住地并に事情の廣告紹介によりて要へらん、後者は渡航費神即によりてよへうんる。

也等移住の便宜は三つの澗係より得うる。

先に渡航せる移住者、移民植民氏に実係する政治的学術的又は高尚的の国体協会会社等及び国家である。之等の方面よりよへうる移住地の現実的

る斡旋指導助の経営め何は政府

の歓実行せうる程度に影響すること少くない。要するに国民及び事業の移住地氏に対する理解及び熱心の経営め何である。

事情の第三は移住地に於ける移住者受容能力である。私は之を植民の受動的動因若くは受動的条件と呼ぶ。即して次章に於て之を研究するであらう。